

令和5年度 狛江市におけるいじめ・不登校等の調査結果について

令和6年11月26日
庁議資料

<調査の目的>

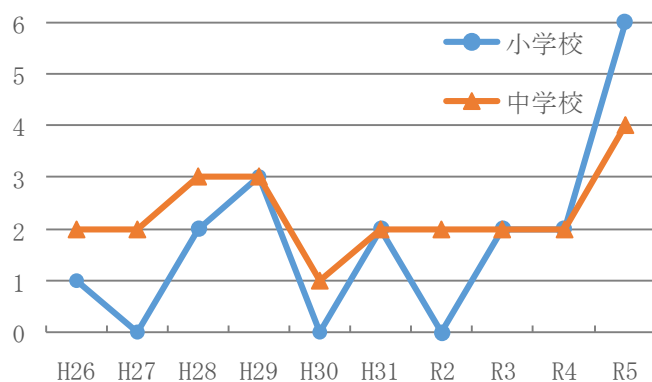
本調査は、児童・生徒の問題行動や不登校等について、市内公立小・中学校の状況を調査・分析することにより、**生活指導上の取組のより一層の充実に資する**とともに、本調査を通じて、実態を把握することにより、**児童・生徒の問題行動や不登校等の未然防止、早期発見・早期対応につなげていく**ものとする。

<児童・生徒数>

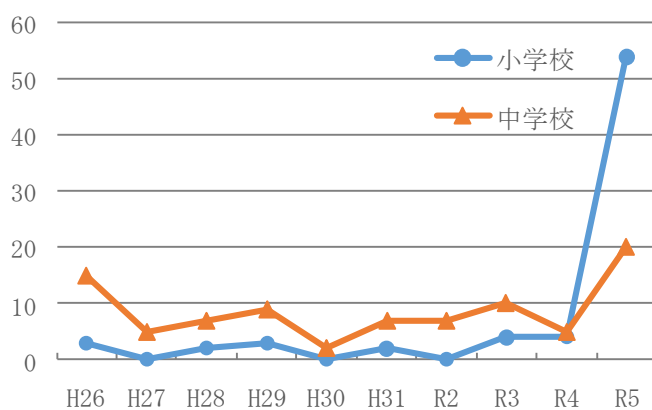
	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R2	R3	R4	R5
小学校	3183名	3223名	3246名	3267名	3394名	3518名	3622名	3701名	3779名	3924名
中学校	1317名	1331名	1349名	1360名	1320名	1286名	1289名	1365名	1417名	1393名

暴力行為

(校) 発生学校数の推移



(件) 発生件数の推移



令和5年度は市内全ての小・中学校において暴力行為が発生し、小学校で54件、中学校で20件、合計74件となった。校内で生活指導主任が中心となり、暴力行為の定義を改めて確認し、いじめに含まれる暴力行為について見逃さずに対応したことによって、令和4年度の9件から大幅に発生件数の増加となった。

小学校では「生徒間暴力」が50件、「器物破損」が3件、「対教師暴力」が1件であった。中学校では「生徒間暴力」が11件、「器物破損」が9件であった。

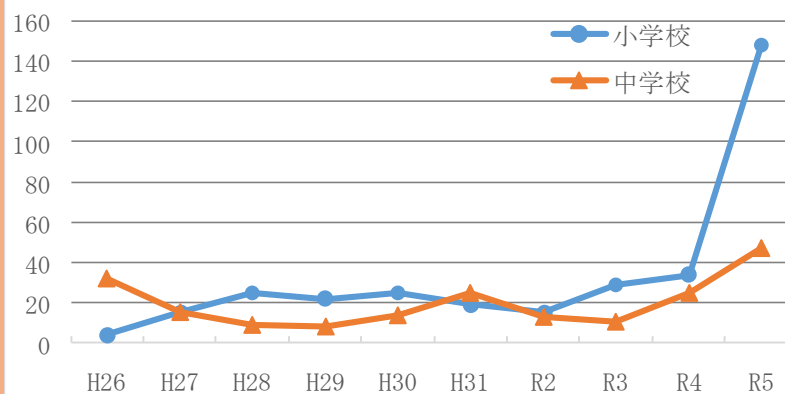
良好な人間関係の構築や学級経営の安定化を図るためのWEBQUの有効的な活用、怒りをコントロールするためのアンガーマネジメント等の指導が必要である。

いじめ

いじめを認知した学校数・いじめの認知件数

	学校数	認知した学校数	認知件数
小学校	6校	6校	148件
中学校	4校	4校	47件

(件) いじめの認知件数の推移



いじめの様態

区分	小学校 (件)	中学校 (件)
冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。	73	31
仲間はずれ、集団による無視をされる。	25	2
軽くぶつかられたり、遊ぶふりをそてたかれたり、蹴られたりする。	35	5
ひどくぶつかられたりたたかれたり、蹴られたりする。	11	2
金品をたかられる。	1	0
金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。	13	4
嫌なこと恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。	32	2
パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされる。	2	9
その他	6	3

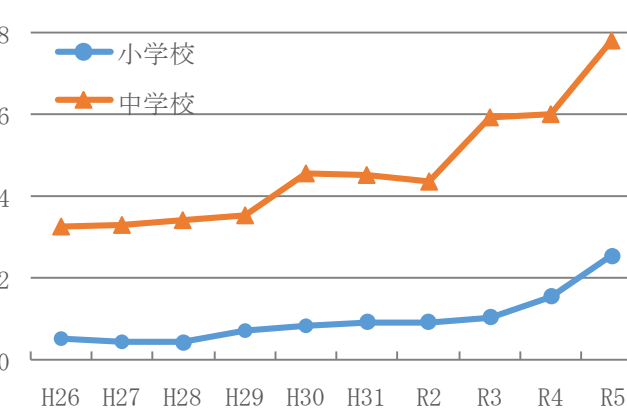
令和5年度はいじめの発生件数は小学校で148件、中学校で47件、合計195件となり、令和4年度と比べ、136件増となった。これは市内全ての小・中学校において、いじめ防止対策推進法の定義に基づきいじめの積極的な認知をいじめ問題に対する最重要課題とし、校長会や副校長会、生活指導主任会等において「軽微ないじめも見逃さない」という共通理解を図ってきた結果である。

いじめの様態としては、小・中学校共に「冷やかしかからかい」が最も多かった。また、1件のいじめに対して、複数の様態が当てはまるケースが増えている傾向がある。

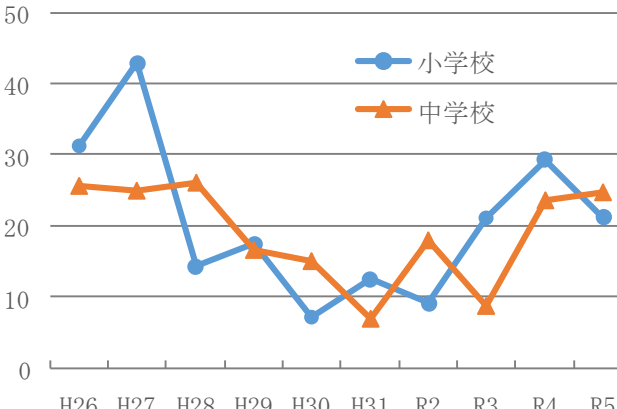
今後も、積極的な認知や、未然防止、早期解決に向けた家庭や地域との連携のための体制づくりを推進する必要がある。

不登校

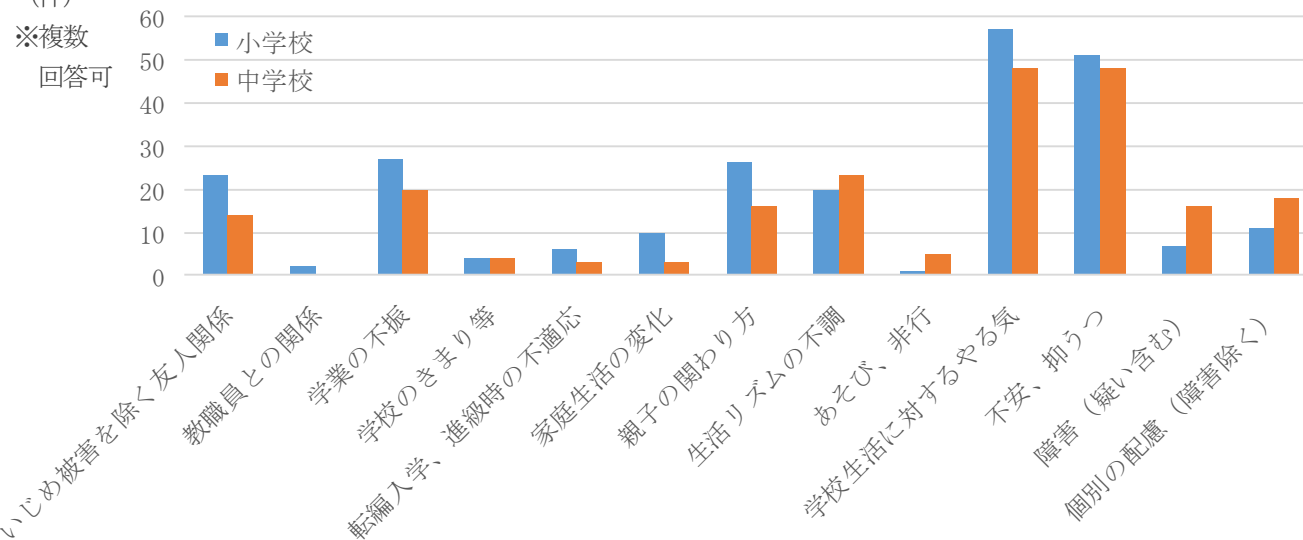
(%) 出現率の推移



(%) 学校復帰率の推移



(件) 不登校児童・生徒について把握した事実（相談があった内容）



不登校児童・生徒の出現率は、小学校で2.52%、中学校で7.82%と増加しており、過去最大の数値となった。不登校児童・生徒の学校復帰率は、小学校では令和4年度から減少して21.2%、中学校では令和4年度から増加して24.8%となった。

不登校児童・生徒について把握した事実（相談があった内容）として、小・中学校共に「学校に対するやる気」「不安、抑うつ」が多い。次いで、「いじめ被害を除く友人関係」や「学業の不振」、「親子の関わり方」、「生活リズムの不調」が挙げられる。また、「障害（疑い含む）」や「個別の配慮（障害除く）」が増え始めており、多様な要因が考えられる。

不登校は学校復帰のみを目標にするのではなく、児童・生徒が自らの進路を主体的にとらえて社会的に自立を目指すための支援が求められるため、引き続き個別の指導を重視していく必要がある。